

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520347
研究課題名（和文） ドイツ語・英語・日本語の数量表現の比較対照研究
研究課題名（英文） Comparative Study of Quantification and Quantity Expressions
in German, English and Japanese
研究代表者
吉田 光演（YOSHIDA MITSUNOBU）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：90182790

研究成果の概要：

英語・ドイツ語等の数量詞言語と日本語等の類別詞言語の名詞表現を比較対照することによって、両言語タイプの数量表現の形式的・意味的特徴を導き、その共通性と相違を分析し、言語外にある対象物の数と量を人間が認知する際に表現形式が認知過程にどのように影響するのかを分析した。両言語タイプでは可算名詞・複数形の有無など相違が顕著であるように見えるが、実際には数（単数・複数）が等しく関与すること、可算・不可算名詞の違いは日本語でも観察されること、対象の性質の認識が数量表現と数量認知に関連することを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：意味論，統語論，数量表現，名詞句，ドイツ語，英語，日本語

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語における数の問題は、これまで欧米

系言語の可算名詞の観点から研究されたが、最近では物質名詞の意味論（均質性概念）も注目され、対象の属性による範疇化に関わる類別詞（助数詞）の研究も盛んになってきた

(Chierchia 1998, 西光・水口 2004 等)。

(2) しかし、先行研究は理論的枠組みが狭いものや、特定現象を過度に一般化したものが多い。他方、日本語の類別詞研究は一定程度進んだが、他の言語との対照はまだ不十分である。

(3) 本研究代表者・吉田は、日本語・ドイツ語の名詞の複数・総称性・類別詞表現を考察し、物質名詞と複数の意味、日本語類別詞の統語論について新しい知見を得たが、数量詞言語と類別詞言語の数量表現の比較についてはこれからの課題として残った。そこで、本研究では、英語を加えて、ドイツ語・英語における数量表現と類別詞言語である日本語の数量表現の資料を収集して、それらを比較対照することとした。

2. 研究の目的

ドイツ語、英語など(数詞と可算名詞が直接に結びつく)数量詞言語と、日本語など(数詞と名詞が「人」などの類別詞に媒介されて結びつく)類別詞言語を比較対照することによって、次の問題を解明し、ドイツ語・英語・日本語における数の言語表現と、当該言語における数量の認知との関連について有意な説明を与えることを目的とする。

(1) ドイツ語、英語、日本語などに現れる数・量の表現は、どのような形態・統語的特徴と意味的特性をもち、いかなる相違があるか?

(2) 言語外にある対象物の数・量を人間が認知する際、これらの言語のさまざまな表現形式が認知過程にどのように影響するのか?

3. 研究の方法

(1) 数は数量詞言語では、可算名詞の単数・複数として表れ、対象の個体認識に応じて数が定まる。物質名詞では最小単位が認識されず、均質な集まりと見られるが、文法上は単数であり、数範疇は数量詞言語の隅々に浸透

している。一方、類別詞言語では、可算・不可算の相違がなく、数量は類別詞を介して現れるが、しかし、数量詞言語でも *three glasses of* のように類別詞に似た表現が現れ、ドイツ語・英語のように近い言語の間でも数の言語化にズレがある。数量表現を考察するには、質量名詞、集合名詞、可算名詞といった名詞分類を一つの言語だけでなく、幾つかの言語において吟味する必要がある。従って、これらの言語の数量表現をコーパス等で分析し、数と量に関する形態的・統語的・意味的な共通性と相違を分析する。

(2) 次に、数量表現の変異と対象認知の関係についてアンケート調査を実施し、数量表現についての反応を分析する。具体的には、「太郎は多数の石/砂を集めた」、「太郎は多量の石/砂を集めた」、(質量名詞の複数化)、「50 Euro ist/sind zuviel」(=50 ユーロは多すぎる:単数/複数か)といったタイプの数量表現の容認度、意味の相違の調査を行い、数量詞、単位表現、類別詞、単数・複数などの言語表現が、どのように数の認知、語彙意味の処理、統語的処理に関連するのか—といった問題を考察する。これによって、数量の意味処理と認知の関係を分析する。

4. 研究成果

(1) Quine, Chierchia, Krifka らの可算名詞と不可算名詞に関する先行研究を検討し、ドイツ語・英語などの欧米系言語と、日本語の名詞と数量表現を比較した。そこから、日本語にも可算・不可算の区別が存在することを発見し、この区別をアンケート調査でも確認した。(成果は論文(4)として発表)。

(2) ドイツ語と英語、日本語の数量表現について先行研究を検討し、可算名詞と不可算名詞(集合名詞、物質名詞)の区別について研究し、Web データやコーパスを分析し、アンケート調査を行った。特に、ドイツ語について数量句と基礎名詞が結合する表現における名詞句の数(単数一致か複数一致か)を検討した。その結果、規範的文法では説明できな

い揺れが名詞の指示対象の把握の仕方から説明できることを見出した。(成果は論文(2)として発表)。

(3) 日本語には、数量表現(数詞・類別詞)と名詞の順序について、「1冊の本」、「本1冊」のように2つの語順があるが、中国語にも類似した語順のバリエーションが見られる。中国語の数量詞表現の統語的なふるまいと意味的な特徴について分析した。(成果は論文(3)として発表)。

(4) ドイツ語、英語、日本語の数量表現を名詞との関係において研究した。先行研究を検討し、コーパス等のデータを分析した。特に、日本語の名詞句とドイツ語・英語の可算名詞、数詞を比較対照し、ドイツ語・英語タイプの言語では、単数形が形態的・意味的にデフォルトであること、日本語タイプでも単数解釈が一般的であることを見出した。(成果は論文(4)として発表)。

(5) 先行研究では、冠詞がない日本語の名詞は、英語・ドイツ語の物質名詞と類似していると指摘されるが、複数「たち」の付加、概数の付加(「机50」)、「多数」「多量」の分布の相違など、日本語にも可算 vs. 不可算の相違があることを明らかにした。この成果はアジアゲルマニスト会議(2008)で、**"Zählbare Massennomina. -Wie wird die Individuierung im Japanischen kodiert?"**(可算の物質名詞—日本語の個性性のコード化)として発表した(学会発表(2))。

(6) ドイツ語の可算名詞は通常冠詞を必要とするが、述語用法や並列など、冠詞が現れない場合がある。英語と類似しているが、ドイツ語ではより無冠詞形が多い。どのような場合に数が問題にならないのかを分析した。この成果は2008年秋季日本独文学会で「ドイツ語の無冠詞+可算名詞の分析」として発表した(学会発表(1))。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

(1) 吉田 光演, ドイツ語名詞の単数に関する一考察, 広島ドイツ文学, 査読有, 22号, 2008, 1-10.

(2) 吉田 光演, 筒井 友弥, *Zwei Kilo Mehl (sind/ist) viel zu viel für den Teig.* — 「数量句+基礎名詞」の数はいかに決まるか, ドイツ文学論集, 査読有, 40号, 2007, 13-25.

(3) Xiaochun Teng, Mitsunobu Yoshida, *A Contrastive Study of 'N+NC' and 'NC+N' in Chinese*, 欧米文化研究, 査読有, 14号, 2007, 85-92.

(4) 吉田 光演, 名詞句の可算性と不可算性の区別 — 言語比較の観点から —, 欧米文化研究, 査読有, 14号, 2007, 33-48

[学会発表](計2件)

(1) 吉田光演, ドイツ語の無冠詞+可算名詞の分析, 日本独文学会2008年度秋季研究発表会, 2008年10月12日, 岡山大学.

(2) Yoshida, Mitsunobu, *Zählbare Massennomina - Wie wird die Individuierung im Japanischen kodiert?*, *Asiatische Germanistentagung (AGT) 2008*, 2008年8月28日, 金沢星陵大学.

[その他]

http://home.hiroshima-u.ac.jp/mituyos/Paper_Yoshida.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 光演 (YOSHIDA MITSUNOBU)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：90182790

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者